

「日々の理科」(第1731号) 2019 (H31), -4, -5

「桜満開! (3)」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

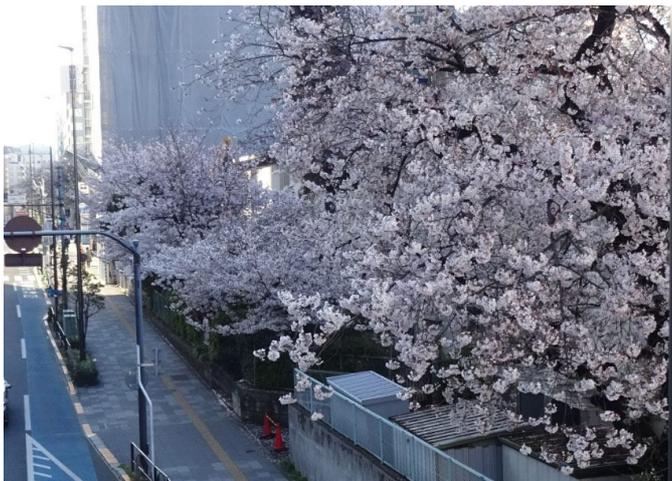
お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

田中 千尋 Chihiro Tanaka

4月の始め、お茶大前の歩道橋からの眺めはすばらしい。小学生が春休みの時期は、この歩道橋を通行する人はほとんどいないので、ゆっくり眺められる。ここに座敷を作って、ゆっくり花見をしたいほどだ。唯一の難点は、4車線の国道に橋脚のない歩道橋なので、大型車が通ると揺れることだ。震度3ぐらいの揺れだ。



歩道橋からは、小学校給食室裏の見事なサクラと、そのとなりの桜蔭会館のサクラが並んで見える。この古風な桜蔭会館の建物も、近い将来、取り壊されるようなので、この風景も見納めかも知れない。



歩道橋の大学側の下り口(踊り場)からは、サクラの枝が触れるほど、近寄って見ることができる。それにしても、なぜこんなに一斉に咲いてしまうのか? 花粉を運ぶ昆虫や野鳥にとっても、もう少しゆっくり咲いてくれたほうが、ご馳走に困らないだろう。百日紅(サルスベリ)のように、何か月とは言わなくても。



本当に「これでもか!」というほど、一つの枝にたわわに咲いている。一見無駄のように見えるこの咲き方に、サクラの種族繁栄の秘密があるのだろう。



サクラに限らず、花は人間の為には咲いているわけではない。生物学的には、「雄蕊」「雌蕊」「子房」「花弁」といった部品で構成される、生殖器官の一つに過ぎない。しかし、多くの人(幼児でも)はサクラの花を美しいと感じ、近くで見ても、遠くでも見て、写真に撮り、画に残したいと思う。特に日本人は、「サクラは美しいものである」と感じる、特別な遺伝子を持って生まれてくるように思えてくる。